

「現代屏風——等身大の物語——」展覧会報告

Contemporary Folding Screens: Life-Sized Stories
Exhibition Report

高田 学
TAKADA Manabu

「現代屏風 ― 等身大の物語 ―」 展覧会報告

Contemporary Folding Screens: Life-Sized Stories Exhibition Report

高田 学
TAKADA Manabu

准教授（日本画）

In June 2024, Seian University of Art and Design's Japanese Painting Course held the exhibition "*Contemporary Folding Screens: Life-Sized Stories*" at the former Ueda Family Residence in Muko City, Kyoto Prefecture. The title of the exhibition, "Life-Sized Stories," reflects the students' attempt to honestly depict their own current thoughts and feelings as they explore the possibilities of expression. The exhibition in a Japanese architectural space, which is different from a museum or gallery, was also an opportunity to explore new possibilities in Japanese painting.

1. はじめに

2024年5月に「現代屏風 ― 等身大の物語 ―」展を京都府向日市にある旧上田家住宅にて開催した。タイトルにある「等身大の物語」には、表現の可能性を模索する成安造形大学日本画コースの学生たちが、現在の自分たちの思いや感覚をそのまま素直に表現しようとする姿勢が込められている。美術館やギャラリーとは異なる日本建築内の和の空間での展示は、日本画の新たな可能性を探る挑戦となった。

2. 屏風の歴史と現代における可能性

屏風は、中国の漢時代に風や視線を遮る道具として誕生した。日本では平安時代以降、宮廷貴族の邸宅で仮の間仕切りとして用いられるようになり、その後、室内装飾としても重宝された。安土桃山時代や江戸時代には、屏風は絵画の代表的な表現形式となり、多く作品が描かれた。長谷川等伯の「松林図屏風」や、俵屋宗達の「風神雷神図屏風」など日本絵画史における代表的な作品も生まれた。しかし、明治時代以降、西洋文化の影響を受け、日本の絵画表現や鑑賞方法は大きく変化した。特に第一次世界大戦後、一般住宅の洋風化が進み、床の間のない部屋に合った額装の絵画作品が主流となった。その結果、屏風や掛け軸といった和の空間で鑑賞される作品は、次第に存在感を失っていった。

1997年から2005年にかけて、成安造形大学の卒業制作展は天津市にある日吉大社や園城寺（三井寺）を会場として開催された。日本画コースは、歴史的建築物での展示に合った、屏風や掛け軸などの

伝統的な形式での作品展示を行った。重要文化財や国宝建築の内部は、美術館やギャラリーとは異なる特殊な空間であり、その中ではどのような展示形式がふさわしいかを考えた。学生たちにとっては、大変貴重な学びの機会となった。

屏風は、木製パネルによる作品とは違い、折り曲げた状態で自立するため、見る角度によって景色が変わるという視覚的効果を生み出す。伝統文化が衰退しつつある今日でも、新たな創造をもたらす可能性を秘めている。

現代では、屏風による日本画作品の発表は少なくなっている。その要因としては、作品を飾るための生活環境の変化が挙げられるが、近年一般的に日本画制作で用いられる木製パネルに比べて、屏風に仕立てる費用も高額であることが大きな要因だろう。現代で活躍する日本画家でも、作品を屏風に仕立てるには予算的に難しい場合が多く、学生にとってはとても手が届かない。しかし、屏風の材料費だけであれば学生たちの負担を軽減できるため、今回の展覧会では屏風を自分たちで製作することにした。屏風の製作工程を体験することは、日本の伝統的な表装文化に触れる機会となり、学生たちにとって非常に貴重な経験となった。



図1 旧上田家住宅 外観
撮影：筆者

3. 展覧会の概要

会場と展示空間

本展覧会の会場は、旧上田家住宅（京都府向日市）である。同住宅は、史跡長岡宮内裏内郭築地回廊跡の上に位置する歴史的建築物で、1910年（明治43年）に主屋と外蔵が建築され、1942年（昭和17年）に現在地に移設された〔註1〕。今回の展示は、主屋（座敷8畳、次の間4畳、6畳、茶の間4.5畳、板の間）および離れ（奥座敷6畳、4.5畳）で行った。

出品者と作品

今回の展示には、本学日本画コースの3年生8名、卒業生2名、教員2名が参加し、以下の作品を出品した（図2～図13）。

3年生（8名）

石原真理《夢現》岩絵具、水干絵具、雲肌麻紙／二曲一双（各88×88cm）／2024年

岡本恵美莉《ゆめみぐさ》岩絵具、水干絵具、雲肌麻紙／二曲一双（各88×88cm）／2024年

小林未空《自由闊達で、》岩絵具、水干絵具、雲肌麻紙／二曲一隻（88×88cm）／2024年

品田渚《湖岸》岩絵具、水干絵具、雲肌麻紙／二曲一双（各30×33cm）／2024年

勢旗滯那《郷愁のせせらぎ》岩絵具、水干絵具、雲肌麻紙／二曲

一双（各 88×88 cm）／ 2024 年

西村南美《冬の朝》岩絵具、水干絵具、雲肌麻紙／二曲一双（各 88×88 cm）／ 2024 年

福島寧々《昼過ぎの広場》岩絵具、水干絵具、雲肌麻紙／二曲一隻（30×33 cm）／ 2024 年

宮丸汐莉《キダチチョウセンアサガオ》岩絵具、水干絵具、雲肌麻紙／二曲一双（各 30×33 cm）／ 2024 年

卒業生（2名）

安永時奈《餌やり図》岩絵具、水干絵具、雲肌麻紙／二曲一双（各 168×184 cm）／ 2024 年

白木雅《幾日》岩絵具、水干絵具、雲肌麻紙／二曲一双（各 168×184 cm）／ 2024 年

教員（2名）

高田学《水辺の植物》岩絵具、水干絵具、銀箔、雲肌麻紙／四曲一隻（88×176 cm）／ 2020 年

竹村花菜《菜ノ風》岩絵具、水干絵具、雲肌麻紙／二曲一隻（88×88 cm）／ 2024 年

会期

2024 年 5 月 12 日（日）～ 5 月 19 日（日）9:30～16:30



図 2 展示風景（主屋 茶の間） 撮影：竹村花菜



図 3 展示風景（主屋 座敷） 撮影：竹村花菜



図 4 展示風景（主屋 座敷） 撮影：竹村花菜



図 5 展示風景（主屋 床の間） 撮影：竹村花菜



図6 展示風景（主屋 座敷） 撮影：竹村花菜



図7 展示風景（主屋 座敷） 撮影：竹村花菜



図8 展示風景（離れ 床脇） 撮影：竹村花菜



図9 展示風景（離れ 奥座敷） 撮影：竹村花菜



図10 展示風景（離れ 奥座敷） 撮影：竹村花菜



図11 展示風景（離れ 奥座敷） 撮影：竹村花菜



図12 展示風景（離れ 廊下） 撮影：竹村花菜



図13 展示風景（離れ 床の間） 撮影：竹村花菜



図 14 屏風製作風景



図 15 骨縛り



図 16 胴張り



図 17 表張り



図 18 蝶番組み

4. 屏風製作の工程

今回の展覧会で使用した屏風は、学生が一から自分たちで製作をした。屏風製作の指導は筆者が担当し、製作期間は2023年8月に6日間をかけて行った(図14)。製作工程は以下のとおりである。各工程で、日本の表装文化の工夫や技術を知ることができる。

骨縛り

屏風の骨組みが歪まないように、和紙で骨組み全体を固定する。この工程で屏風の基礎となる骨組みが安定するので、耐久性を高める上で大変重要な工程である(図15)。

胴張り

骨縛りの上に、さらに厚みのある和紙を貼り重ねる。この工程によって、光が透けるのを防ぎ、屏風に厚みを持たせることができる(図16)。

表張り

和紙を表状に張り重ねる。この工程によって、破れや凹みを防ぐことができる。また、和紙の層が空気を通す構造を作り出すので、屏風全体の湿度を調整し、弾力のある仕上がりになる。

表押さえ

表張りの上から、さらに和紙を全面に貼り付ける。この工程は表張りとも呼ばれ、屏風の表面をより滑らかにし、さらに強度を与える。屏風全体を均一に抑えながら張り込むことで美しく表面を整える(図17)。

蝶番組み

屏風を折り曲げられるように、蝶番部分を作る。折れに強い和紙を、濃い目の糊で羽状に張り付ける。この部分が屏風の要となるため、強度と柔軟性が必要となる(図18)。

くるみ懸け

蝶番部分をさらにくるみ懸けで補強する。蝶番部分を覆う紙を全面に貼り付け、蝶番に強さと柔軟性を与える(図19)。

裏張り

薄い和紙を全体に張り重ねて、屏風の下地を整える。これにより、屏風の表面が滑らかになり、次の工程で張る本紙を安定させる(図20)。



図 19 くるみ懸け

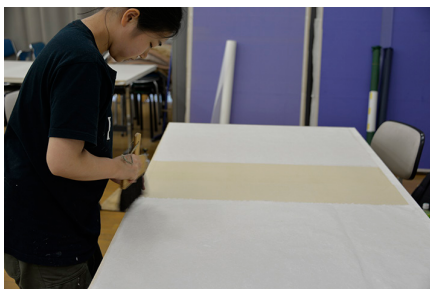


図 20 袋張り



図 21 本紙張り



図 22 作品講評会風景
撮影：竹村花菜



図 23 作品講評会風景
撮影：竹村花菜

本紙張り

作品を描く麻紙を張り込む。(本来であれば、作品を描き終えた麻紙を張り込むが、今回は先に屏風を仕立ててから作品を描いた。) この麻紙が屏風の表面となるため、シワを防ぎながら丁寧に張り付ける。この工程を経て、屏風は完成する(図 21)。

以上の工程を学び経験することで、学生たちは屏風の構造や特徴を理解し、現代的な表現に取り入れることができた。また、裏打ちや本紙を張り込む方法などを、学生たちが普段行っている木製パネルでの日本画制作にもぜひ活かしてほしいという希望もあった。

参加した学生からは、「作業工程が多いことに驚いた」「難しかったけど、紙が綺麗に張れたときはとても気持ちよかった」「普段作品制作に使っているパネルとは違い、4つの面に分けることで配置の工夫ができるのが面白い」「屏風形式という展示方法が、自分の選択肢の中に増えたのはありがたい」などの声があった。

5. 作品講評会

展覧会期最終日の5月19日(日)には作品講評会を開催した(図 22、図 23)。ゲストとして本学名誉教授で日本画家の大野俊明氏を招いた。当日は多くの鑑賞者にご参加いただき、大変賑やかなイベントとなった。土間、座敷、離れの順に会場内を移動し、参加者全員で各作品を囲みながら講評会を進めた。まず作者本人が作品への思いや制作意図を発表し、次に筆者と大野俊明氏が感想や今後の制作へのアドバイスを伝えた。学内で行う通常の合評会とは違う、歴史ある建築物の中での作品講評会は、学生たちに新鮮な緊張感を与えた。

参加した学生からは「今後の作品制作に向けて、的確なアドバイスをいただけた」「展示場所が作品に大きく影響することを実感できた」「学外での発表や来場者との会話は初めてだったので、良い経験になった」などの声があった。講評会では、屏風ならではの表現を活かした作品への賛辞だけでなく、時には厳しい意見も飛び交い、充実したイベントとなった。

6. おわりに

今回の「現代屏風 ― 等身大の物語 ―」展では、伝統的な絵画形式である屏風の、現代的な表現としての可能性を見出すことができた。屏風は単なる間仕切りや室内調度品ではなく、出品者である学生たちが絵画面上に物語を紡ぎ、鑑賞者との対話を生み出す役割を果たすものとなった。

また、出品した学生たちは、自ら屏風を製作したことで、その楽

しさや大変さを経験し、日本の表装文化に対する知識と理解を深めたと考える。

伝統的な表現形式でありながらユニークな特徴を持つ屏風には、これからの日本画にとって新しい表現の可能性があると感じている。

最後に、この展覧会を開催するにあたって、ご協力いただいた長岡宮まちづくり協議会の上田昌弘氏や向日市教育委員会の皆様、今回の展覧会場となった旧上田家住宅をご紹介いただいた河原林美知子氏に、この場を借りて深く感謝を申し上げます。

[註1] 京都府向日市歴史・観光 web サイト <https://www.city.muko.kyoto.jp/rekimachi/meisho/1669851705112.html> (2024 年 12 月 10 日閲覧)

参考文献

- [1] 表具の事典. 京都表装協会, 平成 23 年, p 418.
- [2] 藪田夏秋. 詳説 書画の装い 額と屏風をつくる. 日貿出版社, 平成 11 年, p 167.
- [3] 湯山美治. 表装の技法. 日貿出版社, 1982 年, p 241.

